

あすりーと高岡

第27号



第1回高岡市民体育大会 冬季大会



剣道



アイスホッケー競技



少林寺拳法



スキー競技

新春武道稽古始

相まって健康に対する関心が高まっており、近年高岡市においてもスポーツ人口は着実に増えています。また、スポーツ実施の目的も楽しみ、気晴らし、運動不足解消、健康・体力づくり、友人・仲間との交流やふれあいなど多様なものになっています。さらに、その活動は、従来からの競技スポーツにとどまらず、誰もが気軽に楽しめるニユースポーツと多岐にわたっております。

そのことから、スポーツ施設や指導者等に関する市民のニーズもより強いものとなっております。中でも本市においては、総合体育館やニユースポーツ対応施設などの整備についてタウンミーティングなどでも多く聞かれるところであります。総合体育館については、スポーツコアへの建設が計画されていますが諸事情により実現しておりません。将来新幹線高岡駅が設置されれば、現在のスポーツコアは誠に良い立地条件といえます。そのゾーンに総合体育館が建設されれば、市民のみならず全国規模の大会の誘致や県外から一流チームの練習会場としても利用され、本市のスポーツ振興、競技力の向上に大きな役割を果たすものと思います。また、市民コミュニティの場として、大きなイベントの開催の場として利用も出来るともに、天候・気候に影響を受けず、いつでもスポーツが楽しめる環境を提供できる総合体育館建設が望まれるところであります。

本市のスポーツ振興を一層進めるためには、施設の整備と共にスポーツ推進体制の整備強化が挙げられます。今後さらに体育協会が市民のあらゆるスポーツ活動を包含した機能を持ち、官民一体となったスポーツ推奨の取組みが必要かと思えます。

福岡町との合併により、新高岡市のスポーツ振興に期待するものです。



副会長 大坂 昭輔

スポーツの現状と課題

このような変化は、高齢化社会の進行と相まって健康に対する関心が高まっており、近年高岡市においてもスポーツ人口は着実に増えています。また、スポーツ実施の目的も楽しみ、気晴らし、運動不足解消、健康・体力づくり、友人・仲間との交流やふれあいなど多様なものになっています。さらに、その活動は、従来からの競技スポーツにとどまらず、誰もが気軽に楽しめるニユースポーツと多岐にわたっております。

近年における機械化、都市化、情報化などと呼ばれる社会の変化は、余暇時間の増大や生活水準の向上をもたらしている反面、運動不足や精神的ストレスの増大といった弊害を生じさせている。



totoの収益は、身近に親しめるスポーツ環境の整備や競技力向上の事業に活かされます。

平成十七年度 体育功労者表彰式及び研修会

平成十七年十二月三日
於 磯はなび

研修会に先立ち第2回理事会が開催され、(財)高岡市体育協会・福岡町体育協会合併に関する進捗状況等について審議された。

表彰式は加盟各団体から多数の列席者のもと、表彰状と記念の盾が荒井会長から児童生徒に手渡され、おわりに受賞者を代表して木津小学校の大牧功明くんよりお礼の言葉が述べられた。

引き続き行われた研修会では、「ジュニア選手育成強化事業の概要と今後の見通しパートII」のテーマでジュニア選手の指導者として活躍している、市水泳協会副理事長の藤森裕氏、市バレーボール協会理事長の喜多進氏、強化部の二上義明氏、市教育委員会体育保健課長の山崎一志氏が今までに取り組んできたこと、成果、課題等について発表した。

水泳協会副理事長藤森裕氏より、2000年国体の取り組みと年齢層の選手数の減少に対する方策など、今後の課題について発表いただいた。

続いて高岡市バレーボール協会理事長喜多進氏より、日本のオリンピックの成績と過去10年間のチーム登録数減少の課題について、二上義明氏よりスポーツ少年団活動を通じてジュニア選手育成強化の指導理念について発表いただいた。

最後に市体育保健課長山崎一志氏より、ジュニア選手育成強化事業の今までのかわりと、今後の指定管理者制度について事例を交えて発表いただいた。

平成十七年度 体育功労表彰者 (児童・生徒)

〈レスリング競技〉

- 登坂 絵莉 木津小学校
- 大牧 功明 木津小学校
- 宮原 優 定塚小学校
- 越田 強太 戸出西部小学校
- 加藤 優弥 戸出西部小学校
- 紺野 孝太 横田小学校
- 竹沢 梨乃 国吉小学校
- M I Y A H A R A G Y M

〈相撲競技・新相撲〉

- 四十九 遙 国吉小学校

〈空手道競技〉

- 大橋 春紀 西条小学校
- 西川 諒一 古府小学校

〈水泳競技〉

- 柴田 莉奈 伏木中学校
- 関 亜喜奈 伏木中学校

- 晒谷伊紀子 富山商船高専学校
- 田中 ゆい 富山商船高専学校

〈陸上競技〉

- 杉本 光 富山商船高専学校
- 東海茉莉花 高岡工業高校
- 西岡 孝浩 富山商船高専学校
- 角尾 直樹 富山商船高専学校

〈柔道競技〉

- 海老 泰博 小杉高校

〈フェンシング競技〉

- 林 秀武 富山西高校
- 高岡古城フェンシングクラブ
- 上野恵梨子 南星中学校
- 棚辺 麻波 牧野中学校
- 村田麻由美 伏木中学校

〈バドミントン競技〉

- 江淵 愛美 高岡西高校
- 金山 友萌 高岡西高校

〈ソフトテニス競技〉

- 高岡商業高校男子ソフトテニス部



合併関係

新体育協会の誕生に向けて

平成17年11月1日旧福岡町と旧高岡市が合併し新高岡市が誕生した。このことに関連し体育・スポーツ団体の現時点における合併状況をお知らせいたします。

競技団体については福岡町体育協会傘下には18競技団体が加盟し活動しています。この競技団体と高岡市の競技団体が数回の合同会議と種目毎の会議を経て、おおむね合議に至っており、3月から4月にかけて新高岡市〇〇連盟・協会の設立がなされ新しいスタートが図れるものと期待しています。

体育協会については(財)高岡市体育協会と福岡町体育協会の合併についても具体的事項について今後積極的な話し合いの場を設定しながら早い時期に円滑に新高岡市体育協会の諸事業に取り組んでまいる所存であります。その為に、クリアしなくてはならない事項として財団化・非財団化に関する事、役員の任期に関する事、ハード面とソフト面に関する事、ジュニア層(スポーツ少年団を含む)の育成に関する事、県民体育大会選手の選考方法等に関する事、過去の行事の見直し等に関する事、推進母体(体指、体振含む)に関する事、等々課題は山積していますが一つひとつのことに誠心誠意取り組み1日でも早い時期に新(財)高岡市体育協会としての船出ができますことを念頭に今後努力していきたい。

スポーツ・アドバイス

スポーツ医科学委員

清水 芳 隆

チームづくりのヒント (その3)

前回の(1)身体面(2)技術面に続いて、選手を育成する際の条件について考えを述べます。

(3)精神面については、私の座右の銘の一つ、「その気から日本一」を選手に言い続けました。それは、他人(指導者や親など)からやらされている練習ではなく、自らが目標を設定し、目標達成のための練習には妥協しないで取り組む姿勢を確立することです。目的意識が確立され、「日本一になりたい」と思う選手は、毎日の練習の雰囲気や動作の一つ一つに変化が現れ、密度の濃い練習に取り組むようになります。それは練習への取り組みだけでなく、食事・睡眠といった体調や健康管理にいたる生活全般に自己管理の意識が高くなります。このレベルの選手になると親や周囲に「感謝の念」を述べるようになります。

(4)理論面の指導で気になる問題の第一は、指導者が気づいていない「指導者の矛盾発言」です。具体的には、バドミントンの試合中に選手が決め球として力強くスマッシュを打ち込みサイドアウトになった場面を想定してください。「そんなにぎりぎりのコースは狙うな。真ん中でよい。」とアドバイスが聞かれます。しかしなかなか決定打が出ないと、「しっかりコントロールしてサイドへ打て」と檄が飛びます。また、「ネット前を攻められると、「速く前へ突っ込め」とスピードアップの要求があります。その後すぐに、「何しとるか。早く

戻れ。」と指示が出されます。最大限のスピードで前に動けば、ストップして戻るのは少なくとも体重の1.5倍程度の脚筋力が必要と言われます。このように指導者の発言には、各場面では正解であっても、戦略として、あるいは選手の一連の動きをトータルして観察すると、「矛盾発言」が多いことに気づきます。「人の振り見て我が振り直せ」、考えさせられる諺です。

第2は、指導者が選手に対して、「自分で考えなさい」と指示する場面が多くあります。問題は、指導者が常日頃から選手と、どれだけ考える材料と対処法の共通理解を深めているかです。料理で例えると、いろいろな食材があつて、その一つひとつに煮る・焼く・蒸すなどの調理方法と味の付け方があります。さらに、それら食材の組み合わせは、単品とは異なる味と視覚の満足を引き出す魅力を持つていると思います。指導にあたっては、食材の一つひとつの調理法とその組み合わせについての基礎編の徹底がなされてこそ、季節や食する人の年齢など場面に応じて「考えなさい」という言葉が使えらるのだと思います。

同様に、練習には基本編と応用編そしてゲーム編のそれぞれについて基礎部分とその組み合わせがあるのです。指導者と選手の間には、ゲーム中に起こり得る場面とその対応についての徹底と理解があつてこそ、「考えなさい」と言えると思います。私はよく「ゼロに何を掛けてもゼロ」という言葉を使います。「考える」には考える材料と考える

習慣が必要だと思っています。

(5)スポーツ障害については、指導者は専門医とよく連携をとり、発生しやすい障害についての知識を持つておくことが大切です。チームドクターの存在は理想像ですが、内科・整形外科・整骨院の先生方と絶えず連絡が取れるようにしておくべきだと思います。障害が偶発的なアクシデントによる場合と毎日の練習の蓄積から発症するものとは明らかに違いがありますから、ドクターにチームの実情をよく理解してもらつておくことです。そして、選手が診断を受ける場合にはできるだけ立ち会つて、ドクターとコミュニケーションを持つことが必要だと思っています。

水泳の平井伯昌氏の著書、『世界でただ一人の君へ』の中で、「北島康介選手は、脚部と肩に2度の大きな障害に出会つたが、その都度身体の他の部分を訓練することによって大きく成長した」と語られています。私が経験した一つに、足首を負傷し長い間練習に参加できなかった選手を椅子に座らせて毎日手裏剣投げのようにシャトルをノックしてしました。その結果、彼女は、ラケットの面をうまくシャトルのコースに合わせていくコツを覚えガードの固い選手になりました。障害によつては完全休息が必要な場合があると思いますが、治療の期間に、健全な部分を訓練することによって成長することが多く見られます。練習方法は、向上意欲と工夫によつて変容していくのではないのでしょうか。

